

この記事にある馬場久恵さんは千二小28回生で
24 河井康郎さん、26 川原一恵さんの妹さんです

税理士をめざして1日10時間近く、根を詰めて試験勉強をしていたころ、斉藤昌子さん(41)は体調を崩した。手術も受け、病院通いが続いた。結婚し、マンション生活。30歳を超えたころだ。そんなときに、張り詰めた気持ちをほぐしてくれたのが茶道だった。娘の様子を心配した母親の馬場久恵さん(66)が声をかけたのだ。「好きなきに、お茶をたてていいからね」と。マンションから近い東京の実家には茶室があった。母は若いころから祖母とともに表千家の茶道をたしなんでいた。けいこのある日の朝や夕方に斉藤さんは茶室で母親と向き合い、茶をたてた。「試験にはいつ受かるのだ

同じ趣味を通じ支え合う

いつまでも親子



デザイン部 芦田多恵子

ろう」から始まって、最後は「夕飯はどうする」までゆっくり話せる時間が貴重だった。母の手料理を容器に入れて持ち帰ることもし

茶室で向き合い心が楽に

同じ趣味を通して親子が支え合う。高齢社会ではそんな関係も増えそう。60歳以上の男女を対象にした内閣府の調査(09年度)では、生きがいを感じる時として「趣味やスポーツに熱中している時」を挙げた人が44%と最も多く、旅行(33%)や、おいしいものを食べている時(32%)を上回った。趣味のつながりはそれだけ大きい。

現在、斉藤さんは表千家の講師の資格をとり、税理士の仕事の傍ら、母親とともに、実家でお弟子さんを指導している。

娘は理論先行型だ。「なぜ、こうするのか」と理由を徹底的に追求する性格。母親は感性派で、茶道は頭でっかちになってはいけません。

いと教えられてきた。対照的な母親の考え方はときに対立するが、お互いの刺激にもなっている。

オペラにあげれ音楽大に入った斉藤さん。しかし自分の限界を悟り、就職後、方向を転換し税理士になった。その決断を「これと決めたら、ぶれないから好き」と母は語る。一方の斉藤さんは、細かいことを気にしない朗らかさ、間違いをさらっと認める母の姿に学ぶことが多いという。

1月15日は正月最初の茶事である初釜だ。実家の茶室でお弟子さんに食事を出し、お茶の後には福引がある。福引のプレゼントは何かよいか昨年末から思索してきた。母親の思い出が年ごとに積み重なっていく。